

〈退職記念コラム〉

渡り鳥から見た順天堂大学スポーツ健康科学部の景色

久保原 禅*

Yuzuru KUBOHARA*

1. はじめに

私は1958年長野県松本市の田舎に生まれ、高校卒業までの18年間は松本市で過ごしました。大学時代は大阪府豊中市で（卒業後、一度就職して静岡県に住んだのですが退職）、そして大学院時代は京都市で暮らしました。1993年10月から群馬大学内分泌研究所（現、生体調節研究所）の教員・研究者として群馬県前橋市で21年間ほど過ごし、2015年4月から順天堂大学スポーツ健康科学部（千葉県印西市）に着任、現在に至っています。つまり私は、色々な土地を渡り歩きたいいわゆる渡り鳥です。このコラムでは、私が本学に着任後感じたこと、感心したこと、驚いたこと等について少しだけ吐露してみたいと思います。

2. 地方国立大学（附置）研究所から私立大学への異動

私は、大学教員としても約20年間国立大学（群馬大学）に務めた後、私立大学である本学に着任しましたので、当初その職場環境の違いにかなり戸惑いました。

まず、一番大変だなと感じたのは「教育的学務（ここでは、授業、担任・ゼミ、大学院指導、学位審査、部活指導等）」と「組織運営的学務（各種委員会、各種イベント・式典、入試等）」の量でした。

その合間に「研究（これも学務でしょうが、便宜上区別）」をするのですが、研究時間を確保することの大変さは、前の職場とは比較になりませんでした。これらは必ずしも国立大と私立大の違いということではなくて、群大生体調節研究所と順大スポーツ健康科学部の違いということかもしれませんが（註1）、とにかく職場環境の変化に順応するのが大変でした。

一方で私は、鈴木大地先生がお留守（スポーツ庁長官として出向）の間、数年間水泳部の部長を務めたのですが、水泳の素人ゆえ（現場指導は武田先生にお任せしており）消費労力は少なかった反面、素人ゆえ練習や競技現場以外のところで私なりに気を使っていました（旧テント型プールの改善に関する要望書を提出したり、等）。鈴木大地先生が戻られてから引退しましたが、私とは別世界？の学生達と話をしたり、大きな競技会へ応援に行ったりと、今となってはとても良い思い出です。

それからもう1つ、本学に来て良かったのは給料が少しアップしたことです（笑）。これは嬉しかったです（地方国立大学の給与水準恐るべし!）。

註1) 我が国にある97の国立大学の中で20大学が附置研究所（部局）を設置していて、群馬大学には生体調節研究所（旧、内分泌研究所）がありました。生体調節研究所（おそらく他大学の附置研究所も）というのは学部学生がいない、大学院のみを有する部局です。研究所の所属メンバーは教員、事務職員、技術職員、研究補助員、少数の大学院生、ポスドク等だけであり、研究所での仕事の90%程度は「研究」に没頭することでした。ですから、同じ国立大学であっても普通の学部であれば、教育的学務は当然もう少し多かったと思います。

* 順天堂大学スポーツ健康科学部 教授
Faculty of Health and Sports Science, Juntendo University
(退職年度 令和5年)

3. スポーツ健康科学部の研究活動

スポ健での教育的・運営的学務をこなすのに必死だった私ですが、それでもなんとか研究活動を続けることが出来ました。当初より、そういった学務以外の時間は全て研究に費やしたいと思っていましたが、そういう研究マインドを保持できた理由は、科研費や民間助成金等の支えもあったのですが、本学全体には積極的な研究支援体制があったことも重要でした。着任前は、自分がどの程度研究を続けることができるのか少し不安もあったのですが、学内で研究活動が重視・奨励されていることに安心した次第です。

関連しますが、スポ健の先生方が活発に研究活動をされていることも新鮮な驚きでした。異分野の研究に対する私の勉強不足・認識不足もあったのですが、実際に学部の中で見聞きした先生方の活発な研究活動にとっても感心しましたし、良い刺激もいただきました。スポ健には立派な研究実績があるのですね。

4. スポーツ健康科学部の学生達～部活、箱根駅伝、オリンピック、etc.～

私が本学に着任後真っ先に驚き、感心したのは「学生達の礼儀正しさ(挨拶)」,そして「充実したスポーツ施設の素晴らしさ」でした。陸上競技場やサッカー等グラウンド、複数の体育館、さすが順大スポ健は違うと実感しました。

また、着任してまもない頃こんなことがありました。仕事を終えへばり気味だった私が1号館を出て駐車場に向かって歩いていると、威勢のいい学生達の声が聞こえてきました。見ると、陸上グラウンド・サッカーグラウンド付近の夜空は照明の光でものごく明るかったし、駐車場の方を見ると体育館からも光が漏れ、学生達の声が響いていました。私はサッカーグラウンドの方に行きしばらくの間学生達を眺めながら「このキャンパスの活気は凄いなあ!」などと感心し、パワーをもらいました。毎日、朝も晩も、そして休日も、部活に励む学生達と

その部活を指導する先生方、本当にお疲れ様です!

これほど大規模で活気ある情景は、おそらく一部の有名私立大学以外では見ることはできないと思います(註2)。少なくとも私はこれほど大規模で活気あるスポーツ活動を見たことがありませんでした。私が「順大スポ健の一員になれて良かった」と感じた瞬間でもありました。

そして本学着任後、私としては初めて自校を応援した箱根駅伝、単に日本人選手という括りではなく順大選手を応援できたオリンピックや世界選手権、そして、様々なスポーツ分野における順大所属あるいは順大OB・OG選手達の活躍等を観戦・応援することができました。私にとってはどれも素晴らしい興奮応援体験でしたし、良い思い出になっています。自分の大学の選手を応援できる喜びというのは格別なものですし、どの大学でも味わえるというものではありません。部活に力を入れている大学の最高の特権です。そういう意味でも私は順大スポ健に所属出来て本当にハッピーでした。

5. おわりに

このコラムでは私が本学に着任した際の思い出などを書き綴ってみました。私以外の渡り鳥の先生方にも着任後に抱いた感想等を伺ってみたいところ

註2) スポーツ好きの私にとって、もう1つ懐かしい大学スポーツの思い出があります。それは京都大学アメリカンフットボール部ギャングスターズの活躍です。私が京大の大学院に在籍していた当時、京大ギャングスターズは天オクオーターバック東海辰弥選手を中心に全盛期を迎えていました。特に1986年と1987年の秋の関西リーグ戦でライバル関西学院大学ファイターズを破り優勝、「甲子園ボウル(大学日本一決定戦)」では東の強豪日大フェニックスを撃破、さらには「ライスボウル(社会人王者vs大学王者、日本一決定戦)」では社会人王者レナウンローバーズを破り、2年連続日本一となっています。日本一を争う母校を応援できる喜びは滅多に味わえるものではありません。当然私も甲子園ボウルの応援に行きました。

あの頃のギャングスターズは本当に強かったし、キャンパスに活気を与えてくれました。しかし、順天堂大学のスポーツ活動はその規模といい歴史・伝統といい、さらに凄いと感じています。

です（笑）。私は2024年3月で定年退職を迎えますが、順天堂大学スポーツ健康科学部の教職員の皆様にはこの9年間多方面でお世話になり本当にあり

がありがとうございました。皆様方のご健勝と本学の益々の発展を祈念しております。